



十和田観光電鉄株式会社
代表取締役社長 澤頭 隆夫さん
TAKAO SAWAGASHIRA

鉄道事業の活性化を目指して

おかげさまで、当社鉄道事業も今年で85周年を迎えることができました。

年々減少傾向にある利用者が昭和45年の約165万人から平成18年には約54万人と減少し、旅客収入に依存する経営は、その存続を危惧されてきました。

ところが、十和田観光鉄道活性化協議会の支援により、鉄道事業存続の大きな課題でありました、老朽車両を近代的なAT S（自動停止装置）付車両に代替することができたこと、国土交通省において、鉄道の重大事

課題は電車や線路を維持するための固定経費に充当する財源、いわゆる収入を確保するため輸送人員の定着と増客が不可欠です。そのため、次のことを企画しています。

現況ダイヤの空白時間帯を利用し、駅前の立地を活かし、高齢者の皆さんや子ども連れのかたなど、車で移動できない事情の地域住民へのサービスの一環として、「電車休憩サロン」の提供を考えています。

また、誘客のため、沿線に「花」や「木」を植樹したり、十和田市駅を起点にシャトルバスを運行します。十和田市現代美術館や駒つこランド、新渡戸記念館、疎水百選稲生川や官庁街通りなどにワンコイン（500円）バスを運行することで、電車とバスの連携を図ります。

イベント電車としては観桜号や納涼電車、企業の貸切広告宣伝用に活用したり、電車結婚式などの需要を掘り起こしていきたいと考えています。

また、省エネルギー性に優れた輸送効率の高い鉄道は、エネルギー問題、地球環境問題などに効果があります。当社もその一翼を担えるよう公共交通機関の使命を果たし、鉄道の維持・活性化を実現していく所存です。

今後とも利用者の視点に立ち、利便性、快適性、安全性に配慮した輸送サービスを心がけていきます。

これまで鉄道存続に多大なご支援をいただいたことを肝に銘じて、地域に根ざした企業として、利用客や地域住民から満足していただけるよう頑張っていきたいと考えています。



十和田市駅のプラットフォーム

編集を終えて

はじめて十和田観光電鉄株式会社取材したときに驚いたことは、乗客数が減っていないかったという状況に電車事業の幹部社員はとても喜んでいただけです。本来、昨年より乗客数を増やすことで喜びを得るのが、目標達成、嬉しさにつながるものと当たり前に考えていました。しかし、取材をしていくうちに、電車事業は大きな曲がり門にたたされていることを実感しました。駅ビルからのデパートの撤退、少子化による高校生の減少、国の安全基準の見直しによる整備への先行投資など。

高校生や市民の声を聞くために電車に乗り込んでみると、わたしはある老婦人に出会いました。彼女は、自分の今までの思いを「悔しい」と一言で表現しました。昔は電車で駅ビルのデパートに来て、買い物をして、電車に乗るのが一つの楽しみであったと。今は電車に来て、15分くらい歩いて近くのスーパーに移動して、タクシード帰っているというのです。たった一人の思いや行動では状況は変わりません。

会社も乗客が望むサービスを提供する努力をしなければいけません。これからの会社の取り組みに期待します。